
五男？……四男じゃなかったっけ？

杉花粉撲滅委員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五男?…四男じゃなかったっけ?

【Nコード】

N9219W

【作者名】

杉花粉撲滅委員

【あらすじ】

普通の現代人が、戦国時代に飛ばされました。転生先は周りに流され、主体が無い武将・織田（津田）源三郎勝長。コヤツの行動によってどんなバタフライ効果が生じるかは作者も判りません。

※1…転生箇所については、数多の作品で胃もたれする程にパターン化されているため、割愛♪

※2…処女作のため、生暖かい目で見て下さい。

第一話 東美濃の安寧く南船北馬く

■天正9年（1581年）11月

訳が判らん。周りに流される人生なんて、もう御免だ。

気が付いたら和服美人のおっぱいを吸っていた所までは良かった。ホントに良かった、このままこの生活が続けば……、今でもそう思う。

俺は生まれてすぐ物心ついた時には遠山なんていう家に養子に出されていた。よく判らんが『美濃の豪族（遠山一族）を取り込むためには止むを得ん』と周りの大人が言っているのが、当時は聞こえた。

暫くして直ぐにその当主であり養父の岩村城主・遠山景任が死んで、やっと俺の時代だと思ったら養母（おつやの方って言うらしい）が城代となった。まあここまでは許そう、ウン。俺、元服してないしね、まだ。

しかしこの養母がどおしようもない阿呆だった。何をとち狂ったか知らんが、あろう事か侵略してきた敵将の秋山信友って野郎と結婚しやがった。

今思えば、ここから俺の人生が変わった。

「この色ボケ婆あ！、この恨み晴らさでおくべきか！」

■元龜2年（1571年） 12月

「今日から此処で暮らすのじゃ、良いな」

俺に命令するコイツ。名前を諏訪四郎勝頼というらしい。らしいと言うのも、本人は『武田』勝頼と名乗るのだが、周りの家臣（？）がみんな『諏訪殿』と呼んでいるから……見下されてるな、コ奴。

武田家に拉致られて1ヶ月。俺は今、甲斐の躑躅ヶ崎館に居る。今日から甲斐府中での人質暮らしが始まる。何が原因となるか判らるので、取り敢えず猫を被って生活しよう、ウン。何時の時代も何事も安全第一は世界標準のはず……。

「父上様、早く助けに来て下さいねえ」

■元龜3年（1572年） 1月

俺にも友達と呼べる奴が出来た。

まずは武王丸。俺より2歳年下だが前当主で祖父の武田徳栄軒信玄からのご指名により、もう武田家の次期当主が内定している。そんな訳で、今日も周りの大人達からいろんな圧力を浴びせられている……可哀想な奴だ。

コイツの母親が遠山家の出（我が父上の養女）のため、俺とは義理の従兄弟な訳で……。どういう訳か俺に懐いてくるんだな、これが。

周りの大人は『人質風情（俺の事らしい……いつかぶっ飛ばす！）と友誼を結ぶなど慮外の沙汰ですぞ』と注意するらしいのだが、本人は気にせず俺に近づいてくる。まあ最近では満更でもない俺が居

る。

次に源三郎。武藤喜兵衛昌幸という武田家の外様家臣の長男なのだが、武田家への奉公のため昌幸とともにこの甲斐府中で生活している。

コイツは俺より1歳年下だが体格は俺ときほど変わらるので、よく相撲をして遊んでいる。まだ小さい武王丸じゃあ相手にならんし、下手に次期武田家当主を怪我でもさせると俺達の首が飛ぶ。だから本気で遊べるのはどうしても源三郎となる、楽しいな。

「武王丸様あ、源三郎お。今度は鬼ごっこしよお」

■元亀3年（1572年） 1月

俺の預かり知らぬ所で世界は動く。俺は今、信濃伊那の高遠城に向かっていて。そして今月より武田勝頼様（諏訪性で接すると鉄拳が飛んでくるので、今後は武田性と呼ばせて頂きます、はい）の弟・仁科薩摩守盛信殿のもとで生活することとなった。

原因は判っている。武田勝頼様を周りの大人達が見下すのが無性に腹が立ったので、その筆頭の穴山玄蕃頭信君と木曾伊予守義昌に対して、

「家臣が主家を蔑ろにするとは何事です、徳栄軒様（信玄のこと）が今の貴殿たちを見たらどうお嘆きになるとお思いか、親族筆頭とも云える御二人が物の分別が付かぬとは何事ですか！」

と罵倒したからだ。そして、公衆の面前で子供に恥を掻かされた二人が俺を切り捨てようとした所を盛信殿が仲裁し助けてくれたからだ。

俺の言い分を聞いてくれ！ この一年、衣食住を無償で与えてくれて、尚且つ読み書きまで習わしてくれた勝頼様に俺は恩義を感じている今日この頃。更に、家中で一致団結するべきときに足を引っ張る奴が大嫌いなのだ、俺が。

そんな訳で、「人質風情が！、無駄飯の分際で誰に物申すか！」と息巻く穴山と木曾に対し、「私が此処に居る事で美濃方面から敵が攻めてこないのです。それに貴方方に衣食の面倒を見てもらった覚えは無い」という俺、という構図ができてしまった。

冷静に考えると明らかに此方の分が悪い。刀を持った大人二人と素手の子供一人。このままいけば俺の命は本日終了、これから始まるであろう（？）俺の武勇伝も史実通り何も無し……だった。

しかしそこに現れ出たのが盛信殿だった。

「両者の言い分は尤も。この小僧（俺の事）は拙者がきつく言い含めるのでこの場は我が顔を立てて頂きたい」

やはり出来る男は違うね、カッコいい。さすが信玄公の子息だけはある、ウン。傍系のくせに威張り散らすだけしか能が無い馬鹿共とは違う。

勝頼様張りの鉄拳と半刻（30分ぐらい）の説教の後、

「まあ、お前が兄上を慕ってくれておる事は判っておる。今後その気持ちを忘れないでいてくれ。それにワシも身内とはいえ腹を据えかねておった故な、ハハハッ」

てな具合に『キリッ』とキメる若武者、盛信様。

「盛信様あ、俺は一生貴方に付いて行きますう♪」

第二話 甲斐の虎く有為転変く（その1）

■元龜3年（1572年） 4月

この日は朝から盛信様と城の縁側で将棋を指していた。

「のお御坊」 パチっ

「何でしょう？」 パチっ

「そなたが甲信の地を統べるならば、如何する？」 パチっ

「考えた事がございませんでお答え出来かねます」 パチっ

「ならば今考えよ」 パチっ

「そんな、殺生なあゝ」 パチっ

「…で、どうする」 パチっ

「ハアゝ…、あくまで仮定でございますが」

「ふむふむ」

「碁石金に頼らぬ国作りをしたいと存じます」

「ほお」

「まずは織物。絹・麻・綿などの紡績を興します」 パチっ

「今すぐは無理じゃなあ」

「はい、ただ無理だと諦めていては何事も始まりません。武田家と誼のある京の商人辺りに頼んで職人を寄越して貰い、産業を根付かせれば良いかと」

「成程、5年から10年で何とか成るやも知れぬな」 パチっ

「はい、次に軍事でございますが」 パチっ

「ふむ」

「これまた武田家と誼のある本願寺辺りを介して根来衆から鉄砲を購入します」

「その資金は？」

「今から話そうと思っていたのですが……当地では硫黄が取れます。

これを輸出すればどうでしょう」

「販路は？」

「駿河の港がございます」

「ふむ」 パチっ

「火薬についても根来衆からご教授されれば宜しいかと。因みに原料の硝石は厠の下から取れるそうです」 パチっ

「成程」 パチっ

「資金が足りぬようでしたら、紡績以外にも良質な木材や紙を信濃から、茶を駿河から輸出しては如何でしょう」

「ふむふむ」

「これにより10年後には碁石金に頼らずに甲信の富国が成ると思うのですが……」 パチっ

「うむ、良いことを聞いた。早速来月の評定で御館様と兄上に奏上するでしょう！」

「……少しはご自分で考えてみては……」

「ハハハッ、何を言うか。内から見えぬ事も外からなら見えると言うでは無いか」

「聞いた事がありませぬが」 パチっ

「今、わしが考えたからのお」

「……あのお、王手にございます」

「なぬう、…そこは待ってくらぬか」

「待ちませぬ（ピシヤリ）」

ドタドタッ

「殿お、一大事に御座います」

俺が今日の将棋はもうお開きとばかりに駒を片付けていると、急使が盛信様のもとに駆け込んだ。

「何やら使いが来たようです、今日はお開きとしましょう」

「うむ。（これで御坊とは3勝8敗2分か……童と思うて最初は手加減したが、この童やりおるわい。しかし次こそは…勝つ!）」

「如何した、そのように慌てて!」

「はッ、実は……」

ほのぼのとした時は続かぬもの。大変な報せが武田家に舞い込んだ。

西上作戦の陣中で当主の信玄公が病没したらしい。

おかしい。史実では西上作戦も信玄公の死も元亀4年（1573年）のはずだ。

もしかして、俺の所為？ えっでもまだ何もして無いはずだけど、これってバタフライ効果なんでしょうか……。

第三話 甲斐の虎く有為転変く（その2）

■元龜3年（1572年） 5月

軍制が甲斐・躑躅ヶ崎館に帰ってきた。俺も盛信様に「共をせよ」と言われ、急遽駆け付けた訳だが…、皆鎮痛な面持ちだ。流石の盛信様も青ざめている。

そしてこの窮地を脱したいというのだろう、次第に喧騒へと移った。

「如何する！」

「如何も何も、御館様のご遺言通りにするしか無かろうが！」

「しかしっ！」

吼える小山田越前守信茂を馬場美濃守信春が抑える。ただ馬場自身も怒りの矛先を何処にぶつけければ良いのか判らない苛立ちを隠せずにいる。

「御館様のご遺命に従い、武王丸改め信勝を第20代当主とする。

そして僭越ながらわしが陣代となる」

上座の城代が座る場所から勝寄り勝頼様が大声で、且つ落ち着いた声で皆に宣言する。

だがこれを聞いて反論の声が一部から沸きあがった。

「何を勝手に。幾ら亡き御館様のご遺命でもこの急場を元服前の童に何が出来ようか！ 承服しかねる」

「そうだ。我等親族衆に断りも無しに勝手に決められては困りますぞ！」

またかというか、やはり此处でも穴山信君と木曾義昌が仲良く吼える。

「黙らっしゃい！これは武田家の諸事であり、幾ら親族衆でも他家は他家。そなた等の承諾は勿論の事、干渉は不要じゃ。それに四面を敵に囲まれている当家、直ぐにでも体制を立て直さねばならぬ時に寝言を吼えてる場合か！この戯けい」

よっ長老様。流石信玄公の実弟であり一族の重鎮、武田刑部少輔信廉が場を質す。そして、武王丸を当主の座に座られて以後の説明を始める。

「ささっ、先ずは武王丸殿、元服の儀を行おうか。その後は……まあ追って進めるかのお」

当主の座に座った武王丸がコクリと頷き、一同に背を向けて御旗・楯無に向けて宣言する。

そして腹に一物在ろうとも家臣一同、平伏して復唱するのだった。

「御旗・楯無も御照覧あれ」

「「御旗・楯無も御照覧あれ」」

（あれ？ 遺命って3年間喪に服すなつてのじゃなかったっけ？）

■元亀3年（1572年） 6月

体制は整った。まあ主だった武将が亡くなった訳ではなく、勝ち戦の最中に当主が急死したってだけだから。

信勝の当主襲名もつつがなく終わった。終わったのは良いのだが……。

「何をほざくか！ 領地替えなぞ断じて許さぬ」

「だから何度も申し立てている通り、これからの武田家には金銭が要る。そして金の産出が落ち碁石金が粗悪に成れば直ぐに立ち行かなくなる。そうなる前に事を始めねばと言っておる」

毎日毎日良く飽きずに言い争えるよなあ。今日も朝から穴山信君と盛信様が言い争い、その周りを一門衆、親族衆、譜代衆、外様衆といった武田家臣団が苦渋の表情で侍っている。

穴山曰く「何で我等の領地を勝手に差し替えられねばならぬ。当領地は我等は勿論、先祖の働きにより切り取り守ってきたものぞ。勝手は許さぬ」

盛信様曰く「何も領地替えをして石高を下げようと言っているのではない。物流と産業を促進して武田家を盛り返さねば他家に立ち行かぬと申しているだけだ」

先日俺が進言した案に肉付けしたものを奏上した盛信様だったが、家臣団、特に親族衆の穴山・小山田・木曾が噛み付く事、噛み付く事。そして今日は穴山信君が盛信様の相手となっているのだ。

「ここまで一部の者からのみ不満や異論が挙がっているが、他の者達はどうか」

場の空気が停滞したのを見計らって、一族の重鎮の一人、一条上野介信龍が座を見渡しながら一同に問い掛ける。

うん、重鎮とか長老とかいう人は伊達に歳取ってないね、主導権を握るのがお上手。

ここで下座の方、外様の一角から発言の許しを得ようと手が挙がった。武藤喜兵衛昌幸だった。

「あのう、盛信様は何も武田家だけが潤おうと言っているのでは無いと思います。それに穴山殿の領地駿河は武田家が今川から奪った領地で穴山家一家だけの領地では無いと思いまする」

「外様風情が何をほざく。そなた等は黙っておれい」

「お言葉ですが、この難局を乗り切るに親族も外様もありません。すべてが武田家家臣にございます」

「何お！」

「よう言った真田、正にその通り。『目から鱗』とはこの事じゃ、皆の者、我等一丸となり強き国を築こうではないか」

穴山が言葉に窮した所に間髪入れず、我等が御当主様である信勝が甲高い声で満場に向けて宣言する。

その横で勝頼様が『ウンウン』って漢字に満面の笑みで頷いていた、……この親馬鹿。

（あゝあゝ、穴山、小山田、木曾の3羽鳥（3馬鹿…ププっ）の不満が頂点に達して額に血管浮き上がらせてるよ。……どおなんだろうね、全く）

第四話 甲斐の虎く有為転変く(その3) (前書き)

毎度毎度、駄文ですいません。

第四話 甲斐の虎く有為転変く(その3)

■天正2年(1574年) 6月

史実で云う『長篠の戦い』が起こった。これまた史実より1年早いよ(涙目)。

何で予定通りに皆さん動かないの？ 俺何もやってないよ？ もしかして……昔武王丸と相撲した時チョツと本気出したて泣かしたからですか？ でもあれは武王丸がトロい訳で……。許して下さい神様、マジで。

前哨戦の長篠城攻城戦までの推移は史実通りだった。しかし設楽ヶ原での戦いが違うんだ。

正確には両軍の設楽ヶ原での布陣までは史実通りだったが、武田勢の進撃が違う。

史実では、馬鹿みたいに正面突破を試みて玉碎したはずなのに、何処かの馬鹿が

『態々敵が待ち受けている正面から攻めるのは愚の骨頂。此処は陣城の側面ががら空きでござれば、両翼より討ち入るのが宜しいかと』などと勝頼様に進言しやがった。

お陰で織田・徳川勢は大慌て。急いで側面を槍隊で固めたのだが、鉄砲3段撃ちで対応したのは織田勢のみ。

まあ徳川勢が3段撃ちを習得していなかったのもあるけど……。

終わってみれば、織田勢に攻め込んだ軍勢は痛手を与えつつもこち

らも3段撃ちにより手痛い逆撃を受けて撤退。それを受けて優勢に徳川勢を蹴散らしていた軍勢も撤退を余儀なくされた。一言で言えば『得る物は何も無しの両軍傷み分け』って所かな。

今回は前回の西上作戦と違って織田勢に痛めつけられて傷付いた者も大勢いたので、彼らからの無言の圧力がツッパ無い。

「父上様あゝ、早く助けに来て下さい。マジ周りの目が痛いです」

■天正2年（1574年） 7月

長篠の戦いの詳細が判ってきた。

まず勝頼様に進言した何処かの馬鹿だが、真田一徳斎幸隆だった。この爺様、何をトチ狂ったのか『最後のご奉公だと思い、此度の戦に連れてって♪、…………ゲホゲホっ』とか言って、参戦したのだ。幸隆が生存していたのは史実通りなんだが、戦自体が1年早まったため参戦可能となった訳だ。

流石、老いたとは云え山本勘介と並び称される武田家の智将、織田・徳川連合の陣形から狙いを看破した事で武田家の惨敗を防ぎおった。

うゝん、史実ではこの戦で被害甚大、再起不能となったのを悟った武田勝頼が俺を織田家に返してくれるはずなんだけど…………爺い余計なことをしておって、孫と縁側で遊んでろよ。

戦が終わったと同時に死なれちゃ、文句も言えん！代わりに自分の事のように自慢してくる源三郎をフルボッコ確定！

次に戦死者だが、織田勢に攻め入った部隊からは木曾義昌と駒井右京亮政直のみだった。

その代わりと言っては何だが、馬場・山県・真田兄弟など史実では死んでいた奴らは死ななかった。この辺りは日頃の行ないを神様が見ていたって事にしておこう、俺の所為じゃないはずだ多分！

織田・徳川側だが、織田の諸将に戦死者は無く徳川の榊原式部大輔康政を始め、内藤豊前守信成、松平玄蕃允清宗、酒井雅楽頭重忠、高力河内守清長、牧野右馬允康成が亡くなった。

徳川としては散々の負け戦と言って良いだろう。因みに榊原が死んじゃったら徳川四天王ってどうなるの？

■天正5年（1577年） 1月

この年、我が親父様である織田信長が雑賀衆への攻略を本格的に開始した。

そして俺は、『他国の事は〜思慮の外♪ 自国の事は蚊帳の外♪』などと歌っていられなくなった。

俺も12歳となり、多少の国事は把握出来るようになってきたが、まさか遠い畿内の争いが武田家に影響するとは露にも思わなかった訳で…………。

「ええい、根来衆からの鉄砲はどうなったのじゃ！」

「……、何分彼の地での戦が激化しておりますれば、商いを担当している者の言によりますれば『それ所ではござらぬ、其れよりも武田家の再西上作戦のご予定は？』と返された次第でして…」

「ここは他の地より鉄砲・大砲の販路を開拓してみては…」

「根来・雑賀以外に何処が鉄砲を売るといふのじゃ！」

最近、陣代の勝頼様がイラついている。そしてその勝頼様を宥める役が盛信様と重鎮・信廉殿な訳で……。

（他の家臣の皆さん、もう少し盛信様や信廉殿を助けてやろうよ、身内なんだしさあ）

そしてその不満の原因の関係者（俺は預かり知らんのだけど…）の俺は、評定に参加している。全く持って居心地の悪い事この上ない。

何で元服もしてない12歳の無垢な童（俺の事）が評定に出ているかというと、

「鉄砲購入の案を出したのお前だろ？ だったら結果がどうなるか気にならんか？」

という盛信様の有難くも無い一言があったからだ。

後で聞いた話では、勝頼様が

「この進言の責任者は盛信、そなたであろう！」

と問い詰めた所、盛信様が

「いえいえ、某はある者の案を代弁したまでで…」

と切り替えし（逃げやがった）、

「ではその進言した者を此処に連れて参れ！」

と言いつけたのが事の経緯らしい。

『らしい』というのは、源三郎が『親父に聞いたのだが』という前置きを付けて近況を教えてくれたからだ。

で、今日、俺はその評定が開始するや否や、開口一番勝頼様から有難くもない罵声を喰らったのだが、

「童の戯言を真に受けて勝頼様へ進言されたのは誰でございましょう。（盛信様をジトおと睨むのは忘れてません）……因みにその時金銀の工面についても戯言を申したはずですが」という俺の返答により、可愛い童（俺の事）に責任を転嫁させた事で勝頼様の倍増された怒りを一身に盛信様が受ける事となった。

まあ、新興の絹・麻・綿などの紡績、改善した良質な木材や紙、更に駿河の茶と魚介の輸出により金銭の工面に苦勞せぬようになり始めたし、その進言の原案を出したのが俺なものだから、鉄砲の購入が滞っている原因が織田に起因すると言っても全面的に俺に怒りをぶつけられるのは筋違いだね、盛信様♪。

第五話 武蔵の黄旗く金城湯池く（その1）

■天正5年（1577年） 9月

この時代にも寺子屋のようなものはある。武田家の次代を担う諸将の子息を寺に集めて教育する訳だが……

「だからそうではないと言うておろう」

「…………（もう一度境内の掃除をやるのお、面倒臭いなあ）」

「ああもう、何遍言わせるのじゃ、そこは乾拭きで行なうのじゃ」

「…………（初めて聞きましたけど！、ていうか他の皆さんは水拭きしてますよ）」

「フンっ、やはり織田の子倅だな。口ばかり達者で中身が伴っておらぬわ」

「…………（もう何もしたくない、これは明らかに苛めだ）」

快心の糞坊主めえ、俺の親父が嫌いで美濃から逃げてきたのを俺に八つ当たりしおってえ！ 『心頭滅却すれば火もまた涼し』だったか、何時かその坊主頭でジングスカン焼いてやる！

■天正5年（1577年） 10月

今日俺は12歳にして元服した。普通は15歳の年始めに元服するのだが『信勝様が元服していて、年上の御坊丸や源三郎が未だ元服していないのも変じゃ』と上からのお達しというかがあったためだ。（この季節の元服って…………絶対思いつきだ、この糞暑い最中に正装する身にもなってくれ）

『勝』の字はわざわざ勝頼様から頂き、名を織田源三郎勝長と改めた。

盛信様曰く「上の字を賜るのは大変名誉な事だ。有難く思えよ」との事だ。

そして通称の『源三郎』だが我が親父様の子息は『三』の字を名に入れる慣わしがあるという表向きの言い訳をしつつ、面倒臭いので同時に元服して真田伊豆守信幸と改めた相棒の幼名を貰った。

……ところで、敵の織田姓を名乗って良いんだろうか、この前織田と戦したばかりの武田家家中は肩身が狭いんですが。

■天正6年（1578年） 1月

我が悪友の信幸が従妹で真田信綱殿の娘を娶ることになった。
相手はまだ10歳になってない。ロリだ！ 犯罪だ！ 俺も嫁が欲しい！ 今なら正室の座が空いてまっせえ！

この時代には従兄妹通しの結婚はそれ程珍しくは無いけどさあ。
まだ許婚までらしいが早過ぎるだろお、……羨ましくない、絶対認めんぞ。

■天正6年（1578年） 3月

上杉謙信が急死し『御館の乱』が勃発した。上杉家の景勝と景虎の家督争いにより、長年の北条・上杉間の越相同盟が破綻した。

景虎派を煽っているのは遠山康光という人物らしいが……義母と
言いコヤツと言い如何して遠山の人間は碌な事をしないのかねえ、
ハア。

まあ、ここまでは特に武田家に影響は無い。このまま他家の事はほっとけば良かったんだよ、北条の要請も適当にあしらってさ。

しかし我等が陣代様・勝頼様は違った。北条家の要請を受けて越後に攻め入ったはずの武田家が、あろう事か景勝側と和睦し、更に信玄六女の菊姫を上杉家に輿入れさせたのだ。

これに激怒した北条家が武田家との同盟を一方的に破棄してきた。

昨日の敵は今日の友とは云え、もう少し節度をもって行動しましうよ、勝頼様あ。北条家が憤怒するのも当たり前です！

■天正6年（1578年） 6月

昨年から武田家でも取り入れた『兵農分離』が功を奏し、武田家は農耕気を気にせず何時でも兵を挙げる事が出来るようになった。

事は鉄砲の購入が滞った事が起因している。

「金銭はあるのに鉄砲が無いとは……何のために産業を興したのか分からぬ」

（産業が盛んになって民が潤えば、税收が増えて皆さんニコニコ、平和で良いじゃないですか）

相変わらずの勝頼様、どうやら戦が遣りたいようだ。そんな空気を察する事の出来る男・盛信様が俺に、『金銭を兵に替える方法を考えよ』と言って来た。

ホント武田家には困った人が多い。戦には強いが頭が伴っていないのだ。

そんな訳で俺は今日も武田家一の知恵者と呼ばれつつあり、我が心の友・信幸の親父と相談している。

「……武田家の血筋にも困ったものです。誰も彼も自分勝手に……」
「まあそう言うな。何も今に始まった事ではない。それに皆の頭が良ければ我等のように槍働きが苦手な者の働き場が無くなるというものぞ」

二人で駿河産のしぶ茶をズズウツとすすりながら、考える事一刻。ふと昌幸殿が聞いてきた。

「そういえば、そなたの実家織田も昔から戦好きよのお」

「…熱田を始め三河湾や伊勢湾の港から得られる税金があります故、実入りは良いようです」

「ふむ。近年は年中戦をしておるようじゃが、農繁期はどのようにしておるのか。何か知っておるか？」

「兵農分離なる仕組みを取り入れ、兵を雇う事で農夫と兵を分けているようです」

「それじゃ！ そなたその仕組みを詳しく知っておるか」

「いやあ流石にそこまでは……」

「……左様か」

光明が見えたと思ったが、直ぐにカクツと聞こえてきそうな程に首を落として落胆する昌幸殿。

「その仕組みを取り入れられればと思うたが、まあ仕方が無い。一から兵を雇うしかないと素直に勝頼様に進言しよう」

「そうですね、これまで戦働きの経験者を優先しつつ、農家の次男三男を中心に集めれば数だけは整いましょう」

「うむ、急に兵だけ増えても練兵もあるが、何より武具が不足しては戦もできぬでな。鎧や刀の購入も進めるよう添えておこう」

頭の良い人は違うね、話の先を読むから話が早い！ まじめで愚直

な我が親友・信幸も何時かこうなるのかなあ。

■天正6年（1578年）10月

「エイッ！ ヤーッ！ エイッ！ ヤーッ！」

稲の刈り入れ時だと甲斐府中では連日雇い入れた兵の練兵が続いている。

今回武田家に取り入れた『兵農分離』により、これまで戦の度に各家で召集していた兵が不要になり、農家の皆さんも安心して田畑を愛でている。

そして、ここ躑躅ヶ崎館では飽きる事無く評定をしている。

「して勝頼殿、もう暫くすれば軍勢を動かそうだが、此度は何処を攻めるのじゃ」

最近元氣な長老様・信廉殿が勝頼様に語り掛けると、既にその答えを用意していた感の勝頼様が宣言した。

「敵は北条じゃ！ 一方的に盟を反故にするなど言語道断。上野一円の併呑だけに及ばず、武蔵まで攻め入ってやろうぞ！」

（同盟を破棄されるきっかけを作ったのはアンタでしょうが……まったく。何度でも言わせて貰います、北条家が憤怒するのも当たり前です！）

第六話 武蔵の黄旗く金城湯池く（その2）

■天正6年（1578年）11月

俺の初陣は武田家の上野攻略となった。

（あれ？ 史実では織田家の武田殲滅戦じゃなかったっけ？ まあいい、もう深く考えるのは止めよう）

ここまでは順調に勝ち進んでいる。武田は信濃勢1万2千を率いて上野・箕輪城に押し入ると、まず兵を分けて北の沼田城を奪い、続け様に岩櫃城、厩橋城、桐生城、館林城と落としていった。

流石は勝頼様、平時と違って戦場では惚れそうになるぐらいカッコいい。この頃には他の上野諸家も武田家に従属を申し出ており当初の兵に加え、2万の兵が武田家の軍勢にまで膨れ上がっていた。

（この1万は良く言って張子の虎、悪く言えば烏合の衆だから、前方で誠意を見せてもらいつつ、実戦訓練で頑張って貰いましょう）

対する北条もやっと軍勢を整え鉢形城（現 埼玉県大里郡寄居町）に1万5千の兵を揃えた。また後方の川越城（現 埼玉県川越市）に8千、岩槻城（現 埼玉県さいたま市岩槻区）に9千の兵を入れて武田家の侵攻に備えた。

「ええい、武田の奴輩め！ 一度ならず二度までも我等北条を舐めくさりおって！」

「そうじゃ！ この鉢形城にて氏邦様が蹴散らしてくれるわ」

北条陸奥守氏照と北条安房守氏邦の兄弟が鉢形城の本曲輪（本丸）で、今や遅しと武田勢を待ち構えていた。特に鉢形城城主の氏邦は主将の任を担っているためか戦意が高い。氏邦よりも年長故か若干落ち着いた趣の氏照が答える。

「現状、武田勢はどこまで攻め入っておるのか、兄者はご存知か！

？」

「先程斥候からの知らせが参ったのだが、箕輪城（現 群馬県高崎市）におるそうじゃ」

「ええい、目と鼻の先ではないか、待ち遠しいのお。しかし何故兄上（氏政）は我等を上野まで攻め込ませず、この地で迎え撃てと言うたのじゃ」

「何でも武田の奴輩は2万の軍勢まで膨れ上がっておるとか。なれば兵糧に不安が出るのを待ち、奴等の限界が来る此の地で決戦すれば勝利は必定との事じゃ」

「成程、流石は兄上じゃ。伊達に關八州の雄、北条の太守よ！」

さて、攻め立てる武田勢だが……………。

「鉢形城は北条の北関東支配の拠点、兵も大勢詰め掛けていよう。喜兵衛え、如何程の数が場内におるか？」

「はっ、1万5千にございます」

箕輪城の城内は上野攻略の成功で高揚している。そんな中、今回軍監に任命されても普段通り平静な武藤昌幸が即答した。

「ふむ、予想の範疇じゃ。御坊、兵站は如何なっておる！」

次に今回兵站奉行に任じられた勝長に陣代の勝頼が問い掛けた。因みに勝長と同様に今回初陣の信勝が総大将として箕輪城の城主の座に座っている。

「……あのお、某は既に元服を済ませ、勝頼様より『勝』の字を頂き勝長という立派な名があるのですが」

「はははっ、長年使い慣れた名というのは愛着もあろう！」

「……………（駄目だ、話が噛み合わない）」

「して兵站は如何じゃ？」

「すべて滞りなく。勝頼様より潤沢な金銀を与えて頂いた事で駿河と越後の商人より兵2万が3月は食うに困らぬ量の米を用意出来ております」

「重畳じゃ」

「半月以内に武蔵の北半分を奪い、一月で武蔵全土まで手を伸ばし、半月で甲斐に帰ればお釣りが出るわ!」

……普通の国が2つ丸々入る広さの武蔵を一月半で奪おうとは、無謀と言うか豪儀と言うか……何か策でも在るのかなあ。まあ今回は兵站奉行だし後方で戦を観戦させて貰おう。

■天正6年（1578年）12月

「何故我等が兵糧攻めを受けねば成らぬ! 本来の策と逆ではないか!」

「攻城には守勢の3倍から5倍の兵が要るとは兵法の基本じゃが、まさか米まで兵に変えるとは……」

「つい二月程前に刈り入れたばかりというに……武田が攻め込んできてから未だ一月ぞっ!」

「……軍勢を多く場内に入れ過ぎたのが間違いじゃった。本来此の城には3千の兵が限度、3倍の兵が詰めればおのずと米の消費も早まると言うものじゃ」

「では小田原からの援軍は!? 既に三度も使いを出したはず!」
「……未だだ」

「……ええい、これなら最初から城で待たずに野戦に持ち込んだ方が良かったのじゃ、其れを兄上が臆病風に吹かれた所為で……」

「……」
「兄者、今からでも遅くは無い。城外に打って出て武田の奴輩めを

攻め滅ぼそう！」

「……相手は2万、此方は1万5千ぞ。負けるとは言わぬが、勝ちを拾うのも難しかろう、何せ相手はあの武田勝頼じゃ」

「ええい、兄者まで臆病になりおって！　もうよいわ、わし一人でも打って出るぞ」

「待たぬか！　そなた一人の浅慮で大勢の北条勢を犠牲にするかっ！」

「うッ……ではどうするというのじゃ」

「……城からは打って出る。しかし武田勢には攻め込まず、川越城まで引く」

「それでは此の城は……」

「断腸の思いかもしれぬが、……捨てる！」

「くッ……」

「半月程余計に掛かったが、兵を無為に失う事無く城一つを落とすは重畳じゃ」

「有難き幸せに存じます」

鉢形城の本曲輪にて昌幸殿を褒める総大将の信勝。

（総大将ってカッコいいな、俺も何時か成れるかなあ……まあ弱虫の信勝でも成れたんだし、きっと成れるさ）

鉢形城から打って出た北条勢1万5千も兵糧攻めと武田勢からの追撃と落ち武者刈りにより、6千まで兵を減らしながらも川越城に下がった。

しかし、武田勢の攻勢は留まる事はなく、次の標的に向けて着々と進軍していた。

第七話 武蔵の黄旗と金城湯池（その3）

■天正6年（1578年）12月

上野から武蔵北部に渡って進軍する信濃勢とは別に進軍する軍勢がいた。甲斐勢1万が東に進み八王子城（現 東京都八王子市）に攻め入ったのである。

「信濃勢は上野を落とし、既に武蔵北部の鉢形城を攻めておると聞く。我等も遅れる事無く八王子城を攻め落とすぞ！」

「ははっ」

仁科盛信の檄に呼応し、兵達の士気が揚がる。

「美濃守（馬場信春）、八王子城の様子はどうなっておるか!?」

「はっ、城主の北条陸奥守氏照は鉢形城へ援軍に出ており、八王子城内は寡兵との事。此方は二の丸まで攻め入っておりますればあと一息で落ちると存ずる」

「よう判った、では参るか！」

盛信が馬場に城内の様子を聞き、必勝を確信した。そして最後の一押しとして全軍の突撃を開始するのであった。

「ぎゃあ」

「う、氏照様はまだ戻られぬか!？」

「殿も鉢形城で奮戦しておられ、此方に直ぐに戻る事は出来ぬかと」

「……左様か、ならばこれまで。此処に残った兵で最後の徒花を散らしてやろうではないか！」

「「おおっ!!」」

必死を覚悟した北条勢が最後の突貫を試みるが多勢に無勢、城主不在の八王子城は僅か2日で落城するのであった。

■天正6年（1578年） 1月

北条上総介綱成が岩槻城に布陣した。

「武田勢は潮の如く此の武蔵を攻め入っておる。悔しいが武田の力は本物じゃ、成ればこそ此处より先には進ませては成らぬ」

「「ははっ」」

「なあに、わしも北条2代氏綱様の代から戦ばかりしてきたでな、多少は考えがあるで安心せい」

流石は歴戦の猛者である。士気の下がっている兵を安心させるのはお手の物である。

「さて、信玄の子倅はどう来るか。短慮者かそれとも………」

■天正6年（1578年） 1月

上野から南下した武田勢は士気の低い川越城を落とし、現在は岩槻城を攻めていた。

「ふむ、北条勢は野戦を望むか」

「そのようでございますね」

元荒川の対岸に布陣した武田勢の陣から北条勢の布陣を確かめながら、勝頼様と俺が会話していた。

「して、兵糧の方は如何か？」

「投降した兵の数が予想より多かった事もあり、もって後半月程かと…」

「……そうか、ならばここまでじゃな」

「流石は地黄八幡（北条綱成のこと）、老いても歴戦の勇者である。これまでの弱将とは異なりよく兵を統率し、攻めては引き、引いては攻める。付け入る隙が無いとは此の事じゃ。兵糧も心許なくなってきた故、今回は此処で手仕舞いとする」

陣屋に戻り評定を開くと勝頼様は開口一番、宣言した。仕方が無い武田勢は綱成一人にこの半月の間翻弄され続けたのだから。

「して、その後は如何なされますか？」

最近武田家の軍師の感がある昌幸殿が先を促した。

「うむ、上野は信廉殿を主将に内藤昌豊、昌月親子、保科正直、横田尹松をつけ兵も8千を駐屯させるとして、この武蔵は盛信を主将として馬場信春、信頼兄弟、土屋昌統、小幡昌盛、武藤昌幸に任せらる」

「「ははっ」」

「信濃勢は引き上げるが甲斐勢はそのまま武蔵に残す。綱成は手強いが安易に攻め入らず、北条から此の地を守れ」

「はっ」

「皆、ご苦勞であった。此の後も気を緩めず諸事に力を注いで欲しい」

「「ははっ」」

戦後の分担が決まると信勝が戦の終結を宣言し、諸将の勞を勞うのであった。

こうして、秋から始まった北条攻めは一旦幕を下ろすのであった。

（はあ、やっと戦が終わった。正直、後方でも人の生き死にを間近で見たときは流石にビビった。関東は風が乾いて痛いし、早く甲斐に帰って暖かいほうとうでも食いたいなあ）

■天正7年（1579年） 1月

年も明けて新年。我が兄・織田三位中将信忠殿と武田家の松姫様の婚儀の日取りが決まった。

流石に武田侮り難しと考えたのか、ウチの父ちゃんが武田家に使者を遣わした。

（松姫様、良かったね。史実では適わぬ恋に生き、未婚のまま尼僧になったんだもん）

そんな訳で、何でか知らんけど表向き松姫様の露払い、裏テーマとして人質解放ということで、俺も安土に同行することになった。

……同行するのは良いのだが、なんで木曾義春と一緒に付いてくる、何で？

事の発端は長篠の戦いで親父の木曾義昌が戦死した事が始まりだ。普通なら長男が早世しているので嫡男の義春が家督を継いで一件落着くのはずだった。

だがこの世にはトチ狂った女が大勢いるらしい。生まれたばかりの3男で赤子の岩松丸（後の木曾義利）を当主にすると真竜院（真理姫のこと）が騒ぎ出した。

家臣の家督相続は主家が認めるものだから、最初、勝頼様も怒って「義春もそなたの子ぞ！ 少しは義春の気持ちも考えよ！」

と説き伏せようとしたのだが、結局、妹とはいえ流石は武田信玄の娘、気の強い事この上無い訳で……勝頼様が負けた。

（北条に勝った勝頼様を負かすなんて……強いにも程があるだろう！）

ってことで、宙ブラりんの義春の世話をこれまた何でか知らんが俺が見る事になったというか、またまた盛信様に押し付けられた。

そして今日、松姫様と共に安土に向かう訳だが、体面を気にするウチの父ちゃんが、

「今まで御坊を人質にとっていたのだから、今度は武田家の番だ」と言い張った。

当初は勝頼様は、

「松を嫁に出すのだから、人質は不要！」

とつつ撥ねたのだが、

「武田の2倍の国力を持つ織田を今怒らせるは、下策」

との家臣団からの勧めもあり、しぶしぶ了承した。そんな訳で宙ブラりんの義春に白羽の矢が当たったという訳だ。

（義春も大変だなあ。まあ俺も武田家には恩義があるし、義春が寂しく無いように可愛がってやるかあ）

第七話 武蔵の黄旗く金城湯池く（その3）（後書き）

戦の場面は上手く書けませんでしたので、端折りました。
もう少し北条綱成をカッコよく書ければとも思ったのですが……。
以後、精進します。

第八話 近江の覇王と金科玉条（その1）

■天正7年（1579年） 2月

我が兄・信忠殿と武田家の松姫様の婚礼の儀も無事に終わり、俺は尾張の片田舎・犬山に居る。

尾張に赴く前に上様（我が父・信長のこと、こう言わないと怒るらしい。でも基本は『親父様』が気に入っている）から、

「既に元服は武田で済ませているそうだな。なれば、わしからは城と領地を与えよう」

（あれ？ 信房って名前くれないの？ ……さては面倒臭いのを嫌がったな）

今まで苦勞させていた事を気にしているのかな、親父様は俺に犬山3万石の領地を下賜してきた。やったね、これで俺も晴れて一城の主だ。頑張っちゃうもんね♪

そんな訳で義春を連れて（何で付いてくるの？ 人質は安土に居なくてまずくない？）、犬山に来た……のは良いのだけど。

「殿、領主就任おめでとうございます」

「「おめでとうございます」」

ってな具合に、新しく俺の家臣になった人たちからの就任の儀やら何やら、更に領内の豪農やら豪商からの拝謁の儀やら何やらが続き、正直うんざりしている。

（はあ、義春が羨ましそうに俺を見ているよ。何なら変わってやろうか？）

■天正7年（1579年） 5月

「安土の天主が出来た。見に来い」
と親父から書状が来た。……正直、領内の政が忙しいのであまり行きたくない。

まだ14歳の少年で更に政の初心者。何かと思える事も多く、また隠し田の取り締まりにはどうしても現地に行かねばならず、商人からの税収に齟齬が無い数字と睨めっこをしなければならず……やる事が目白押しだな、領主って。

かと言って、織田家の頂点に君臨する我がお父様の命令は聞かなければならず、しぶしぶ安土まで行ってみれば、城番の人から

「但し身内とは云えども見物料は頂く事が決まりでして……」
と言われ、仕様が無いので泣け無しのお小遣いから見物料（入城料）を払って、親父に会いに城内に入ることになった。

（義春を始め共の者の分を加えると結構な額になった、……親父、
どんだけガメてんだ！）

城内の謁見の間に通されて暫く待っていると、

ダンっダンっダンっ！ （誰だあ？ 大きな足音立ててえ！ 行儀
が悪いなあ）

我が親父様が足早に謁見の間に入ってきた。

「御坊っ！ 息災かつ！」

「はっ、此度はお招き頂き有難う御座います」

「うむ」

（久しぶりの親子の対面だぞ！ もっと喋れよ！）

「それにしても流石は上様、他に類を見ない絢爛豪華な天主でございますね」

「うむ」

（……だからさあ）

「時に昨年、上様は右大臣・右大将を辞任されたとか、……次を見越しての事と存じますが、此の後は如何な国造りをなさるお積りでしょうか？」

「……そなたなら如何する？」

「私ですか？……そうですね、私なら朝廷には祭事のみを担当させ、寺社と公家にはその補佐をさせますね。煩い人たちに煩わされたくありませんから……」

「ふむ」

「そして武家が政事と軍事を担当する、そのような国造りをしてみたいと存じます」

「……成程の、そなたは他の兄弟とは少し違うようじゃ」

「はあ？」

「今日は有意義であった、また参れ」

親父との会談は速効で終了ということかな。高い謁見料を払って会いに来たので普通は『もう少しお話しましょ』と言いたいところだが逆に早く終わってくれて助かった。ああ無口だと話題の提供に疲れるね、全く。

安土の天主を出て、改めて天主を見て改めて思う……こんなデカイ建物建てて、耐震構造は大丈夫なんだろうか？

■天正7年（1579年） 7月

平和だ。誠にもって良い事なのだが、……暇だ、退屈で死んでしま
う。

寧日、政治（主に書類の承認と家臣からのお話を聞く事）ばかりし
ていて、此の所、城外に出てないなあ。

最近、領内に出来た商店でカステラを出し始めたと聞く。俺も食べ
たいなあ、それも現地で！

■天正7年（1579年） 9月

なんと！ 聞いて驚け！ 俺も結婚することになった！

相手は亡き浅井備前守長政と我が叔母・お市の方との長女・茶々で
ある。

源三ろ……ゴホンっゴホン、信幸と同じで従兄妹通しの結婚になる。
まあそれはどうでも良い。

まだ10歳だが、母親に似て美人らしいし……ぐふふふつ、楽
しみだ。今は叔父上（信包殿）の安濃津城（現 三重県津市）に居
るみたいだし、お忍びで顔を見に行っちゃおうかなあ。

イカン、義春が此方を見ている。鼻の下が伸びているのがバレてし
まう。義春には『カッコいいお兄さん』であり続けねばっ！

第九話 近江の覇王（金料玉条）（その2）

■天正7年（1579年）11月

目出度く茶々との婚礼の儀が終わった。まだ相手が10歳と幼いので夜の営みはもう少し後という事だが、まあ暫くは我慢我慢！

茶々といえ、本来は婚礼の儀が終わるまでお互い一言も話すのは厳禁なのに、

「勝長殿は、我が父、浅井備前守長政をどう思われますか！」

とか、何か怒ってるぽい言い方で問い掛けてきた。

此方としても前世で『聞かれた事はきちんと答えを返すこと』と躰けられてきたため、少し考えた後に

「うんゝ愚将とか劣将ではないな、少なくとも。ただ、忠と義、または恩と盟と言った方が良いかな、その選択を誤ったというところかな。ただ此の戦国の世で事の正誤がどう転ぶかは神のみぞ知るところであれば、長政殿の選択を誹謗することは俺には出来んよ」と答えた。

（何を聞きたかったんだろう。よく判らんが何か奥の方で聞いている女中がハラハラしていた……ような気がする、ここは茶々にだけ注目して他は無視だ！）

「有難う御座います。この茶々、幾ら伯父上からの命で結婚するとは云え、実父の名を貶めるような方と結ばれるは嫌で御座いましたので……。勝長様が誠の男で良う御座いました」

（これって合格ってこと？ それにしても勝気な子だなあ）

「うん、これからは夫婦となり一生を共にするのだから、思う事は何事も話し合っていこう」

これにより、晴れて俺達は夫婦だ。目出度し♪目出度し♪ 茶々が大人になったら子作りに励もう！

■天正7年（1579年）12月

他国の状況が伝わってきた。

まずは東国の武田家だが、信勝と信幸からの文によると常陸の佐竹と盟約を結び、更に安房の里見を北条から寝返らせたようだ。

それにより、北条の領地を三方から攻め入ったことで遠国佐竹が下総を、里見が上総を北条から奪ったようだ。そして武田は武蔵を完全に支配する事が出来たようだ。

これによって、北条は相模・伊豆の2カ国となった訳だが……、四代続いた家柄だけに武田に服従するには難しいかな。

次に徳川家だが、長篠の戦いからの傷も癒えたとはいえ、西に織田、北と東を武田に抑えられている訳だから身動きが取れない状態だ。巷では律義者との風聞が流れているが、史実の通りならば腹に二物も三物も隠している希代の謀略家だからなあ。そろそろきつと動き出す頃だろう、というのが俺の推測だ。

最後に上杉家だが、御館の乱から一段落したが血で血を洗う内乱のため、上杉氏の軍事力の衰退は否定しようがなく、外からは柴田勝家率いる織田北陸方面勢が攻め、内からは家臣で北越後の新発田重家が造反して身動きが取れない状態になった。此処で武田家との誼を通じて織田との停戦を働きかけているのが現状だ。

次に西国だが、羽柴筑前守秀吉率いる中国方面勢が播磨の三木城を

包围している。別所勢は寡兵での籠城となっているらしいから長期化しているようだが、史実では来年早々に開城されるだろう。

そして本願寺攻めだが、此方もそろそろ佳境に入っており、本願寺第十一世顕如と親父様の間で和議の詰めが進んでいるようだ。まあ和議といっても内実は大坂退城で本願寺側の負けというところだろう。

うん、紀伊の根来・雑賀ももう一息だし、後は四国の長宗我部と九州の島津・龍造寺・大友をサクッと片付けて、その頃には東国を統一しているはずの武田と手を結べれば……、『泰平の世よ！ こんにちは』ですね。良いんじゃないですか、良いんじゃないか！

まあ、最近、何か俺の知らない所で皆さん頑張ってるみたいだし。早く平和に暮らそうよ、一回の人生なんだしさ、……普通はね。

■天正8年（1580年） 1月

最近、俺は自分規範というか指針というか理念について考えている。

夫婦仲良く子作りに励んで、今まで経験してこなかった分、賑やかな家族団らんを味わいたい。

戦とか血みどろの乱世は早く終わって欲しい。

そして史実と違い、天寿を全うして一生を終えたい。

第一の家庭については、いたって良好。円満な『おままごと夫婦』を満喫している。後2〜3年して子供が出来れば言う事無しって感じがな。

ただ、茶々と義春の歳が近い所為か、最近あの二人の仲が怪しい。
(後で義春を軽くシメておこう!)

次にこの乱世についてだが、どうなるんだろうね、全く。

ため息が出る位に戦端が広がっているように思えるんだけど……、
ウチの親父様が天下統一して大丈夫だろうか？ 先行きが不安で仕
様が無い。

かと言って、種薄の秀吉さんでは一代限りだし、ドケチの家康さん
じゃ閉塞感全開の世の中だし……、何か考えるだけで鬱になってき
たので止めよう。

最後に天寿を全うすることだが、これは起こるかどうかわからないが、
『本能寺の変』を回避すれば、フラグを薙ぎ倒せる訳で……、光
秀ええ余計な事すんなよ!!

そういう訳で、

『家内安全、平和一番、そして人生謳歌でナンボのモンじゃい』
うん、今月の標語はこれで行こう♪

第十話 近江の覇王（金料玉条）（その3）

■天正8年（1580年） 2月

2月に入り我が親父様・信長公から安土に来るようにお呼びが掛かった。何だろう。最近特に悪い事した記憶無いんだけど……。きちんと安土城の見学料を払って、城内に、そして天主に入って暫く待つと、

ダンっダンっダンっ！ （親父様のご登場♪）

「御坊、息災かっ？」

「はい （勝長って立派な名があるんですけど……自分が付けた名前じゃないから呼びたくないのかな、この意地っ張りい）」

「ふむ、此度の本願寺との和議についてだが、そなたが纏めよ！」

「（はあ？ 佐久間さん（信盛の事）はどうしたの？） 本願寺との交渉は、佐久間右衛門尉殿が朝廷のと仲介をされていると聞いておりますが」

「あの阿呆うじゃ埒が明かん！ その方代わりに纏めよ」

「左様で御座いますか、お受けさせて頂きます。（親父様、顔怖いよ。顔中の血管をピクピクさせながら怒るなよ、俺に！）」

あれ？ 佐久間信盛の放逐って8月じゃなかった？ はあ、また何処かで何かやらかしたかね、俺。茶々と云い、佐久間と云い、織田家に戻ってもバタフライ効果が発動してしまいましたよ（涙目）。

それにしても佐久間さん可哀想に。高野山に行っても仲間にして貰えず、最後は寂しい老後を過ごしたんだよね、此の人。

何時か迎えに行つてあげるからね、それまで我慢して待っててね。

■天正8年（1580年） 4月

朝廷から勸修寺晴豊殿と庭田重保殿を勅使として遣わして、漸く本願寺との和議が成立した。

「御坊、ご苦労！」

「ははっ（言葉少ないよ、もう少し労ってよ）」

俺は無事に親父様の期待に応えられたようだ。

ただ問題というか何故か本願寺一派が退去した大坂の跡地を、我が愛すべき親父様は従兄弟の津田七兵衛信澄に

「安土に負けぬ城を作れ」

って命じたのだった。

でも何で俺じゃなくて信澄殿に任せるんだろうと思ってすぐに、ある事に気が付いた。信澄殿の幼名も俺と同じ『坊丸』だったのだ。多分（というか間違いなく）親父様は、

「大坂の城は御坊に任せる」

って近習言いやがったんだ。それを近習が俺と信澄殿を間違え、その間違いを質するのが面倒だから親父様は訂正をしなかったのだ。

まあ2ヶ月の間忙しかったから、楽できていいけどさあ。何か寂しいなあ、僕ちゃん♪

■天正8年（1580年） 6月

此の日、京都で大規模な観兵式（軍事パレード）が行なわれた。俗にいう『京都御馬揃え』だ。

（史実では来年の4月にやるんだよなあ……：気にしない、もう気にしない！）

運宮・指揮のすべては明智日向守光秀殿が取り仕切った。

流石は光秀さん、こういった事をやらせれば日本一！ 諸事万端、何も言う事は御座いません……4月の涼しい時期にやってくれればですが。

親父様も嬉しそうに珍しく終始ニコニコしている。

この馬揃えの目的は、天下布武を標榜する親父様が周辺大名を牽制し、力を誇示するためだと専らの噂だ。

隊列の順番も一番に丹羽長秀殿を始めとする摂州衆、若州衆、西岡の河島（革島一宣）。

二番に蜂屋頼隆殿率いる河内衆、泉衆、根来寺の内大ヶ塚、佐野衆。三番に明智光秀殿の大和・上山城衆。四番に村井貞成殿と続き、次は我等親族衆へと続いていく。

何か偉くなったみたいで嬉しいな。でも信孝殿は『順番が……何故、三介や信包殿の後なのじゃ』と殺気を孕んでブツブツ言っている。

（遠目に見ると怖いよ、兄上）

でも親父様は、『来月もやる』とか周りに言ってるみたいだ。これは、あのニコニコ顔の裏で何か考えてるなあ、絶対。

最近、お近づきになった（領地も尾張と伊勢で近いしね）滝川彦右衛門一益の御大がボソツと教えて貰ったんだけど、正親町天皇に讓位をうながすためらしい。

正直に直球で『いい加減に、退位しろよ』って言ってやれば良いの

では、……って天皇さんに面と向かって言うのは拙いですね（僕ちやん、反省）。

それにしてもこの糞暑い初夏の最中にやらんでも良いと思いません。天皇さんや見物の公家や町人の人達が汗だくでダルそうにしていますよ、父上様。

来月もこれと同規模の馬揃えをやったら、間違いなく熱中症で倒れる人が続出します！　これは、織田の家名に恥をかく事になりますんか？

第十一話 飛驒の喜び／虚心坦懐（その1）

■天正8年（1580年） 7月

この日、俺はまた我が『洋酒の似合う男』親父様に呼び出された。呼べば喜んで駆けつけるとでも思われてるのか……、正直ウザい。どうせまた面倒臭い事を言い渡されるに決まっている。

ダンっ！ダンっ！ダンっ！……ドカツ！（親父様、登場）

大きな足音を奏でながら親父様が現れ、上座にドカツと座ると、おもむろに

「御坊、息災か!?」

「はっ（だから、俺はもう勝長って名前だって!……いい加減覚えよ）」

「本日そなたを呼んだのは他でもない。二点程そなたに申し渡す事がある」

「はっ（何だろう。とてつもなく嫌な予感が……）」

「一つは、そなた徳川殿の息女を娶れ!」

「はぁ?（今何と仰いました、父上）」

「何を呆けた声を出しておる! 徳川殿の息女を側室にせよと申しとおる!」

イヤイヤイヤイヤッ! ムリムリムリムリッ!

そんな事したらウチの茶々が激怒します。唯でさえ俺の理想は『家内安全』ですから…。

「しかし、それがしは先頃茶々と夫婦になったばかり! その義は

平にご容赦を！」

「成らぬ（怒）！ 既に双方で決まった事じゃ」

「…………（如何しよう、茶々が怖い！茶々が怖い！茶々が怖い！）」

「嫌とは言わせぬ。婚儀は来月。良いな！」

俺は何も言えず、平伏するしかなかった。

どうやって茶々を宥めるか（自信ありません！ 俺）。どうやって

茶々の機嫌の良い時に言い出すか（言い出せるの？ 俺）。どうや

って茶々に側室を認めって貰うか（殺されない？ 俺）。茶々の事

ばかり考えて、親父様が次の話題に入っている事に気付かなかった。

「次に戦の事だが…………、聞いておるのか！」

「あつ、はい」

「戦の事だが、わしは近々西国へ参らねば成らぬ」

「…………（それが俺と如何関係するの？）」

「何でもサル（秀吉さんの事かな？）が言うには、『上様の力なく

して毛利と雌雄を決するは難しく、何卒、西上願ひ奉り候』との事

じゃ」

「…………（へえ、史実にそんな事合ったっけ？……………あつた

！ 本能寺の変のチョッと前にそんな秀吉さんが文でお願いしてた

！ これって本能寺のフラグですか！？）」

「聞いておるのか！」

「…聞いております。（俺、史実ではこれに付いて行って、二条城

で殺されるんだよなあ！ ヤダっ！ヤダヤダヤダ、行きたくな

いっ！）」

「そこでじゃ…」

「はっ（一緒に行きたくありません！ イヤっ！イヤイヤイヤ、

それ以上は何も聞きたくありませんっ！）」

「そなた、飛驒路に向かえ！」

「……………はあ？」

話がぶっ飛んだ。親父様の話を要約すると、親父様が美濃・近江にいるから飛騨の姉小路家が大人しくしているが、西国へ行ってしまうと何やら姉小路家が動き出しそうで目障りだ。だから俺に姉小路家を滅ぼし、ついでに上杉が弱っている内に越中を奪えって事らしい。ついでに俺一人じゃ危なっかしいから滝川一益をつけてやるって言うてくれた。

あれえ？ 本能寺の変フラグじゃないの？

■天正8年（1580年） 7月

「お前様っ、御義父上様から側室を貰うように言われたとか、誠にございますか！」

人の口に戸はたてられぬとは良く言われるが……俺が犬山城について早々、茶々に問い詰められている。頼むから落ち着いて、ねっ、これじゃあ話が出来ないよ。

「お前様っ！ ……如何なのでございます！？」

「ウン……ソナコトイワレタカモ？ （可愛いお顔なのに、額に血管浮かばせて詰め寄らないで下さい）」

「…………グスッ」

「……（あれえ？ 今度は泣いてる）」

「グスッ、お前様はいつも私だけを見てくれる。私だけを思ってくれる。そう信じておりましたのに」

「いや…見てるよ！ いつも思ってる！、ウン！」

「じゃあ何故ですっ？ ……もしや、もう私の事飽きたとか、そうよ、もう私の事なんで忘れてしまったのよっ！ 今だ夜伽の出来ない私

が嫌いになったのよっ！」

「いや…そうじゃないってっ！（なんで勝手に決めつけるかなあ、そうじゃないって言ってるのに）」

この後小一時間、気が付くと直ぐに悪い方に話を決め付けようとする茶々を宥め続ける俺が居た。女の子って……。

「ふう、少し落ち着こう、ね。今回、親父様に側室を貰えって言われた時も俺一度は断ったんだよ」

「エグッ！エグッ」

「……（何か泣き方が段々汚くう…ゴホンゴホン）、でもさ、『もう両家で決めた事』って言われたもんだから、断りきれなくて…」

「ヒグッ！ヒグッ」

「でも、でもだよ。俺がこの世で一番大事に思っているのは茶々だし。これからもそれは変わらないよ」

「……ヒィッグ、本当…ヒィッグ…でござい…ヒィッグ…ますか？」

「うん、変わらない自信がある」

その後更に小一時間、茶々が泣き止むまで頭を撫でてあげている俺が居た。……親父様、この恨み何時かお返しさせて頂きます！…つて、飛騨攻めの事まだ茶々に話してないや、もう面倒臭いなあ！

■天正8年（1580年） 8月

督との祝言が終わった。まあ俺としては二回目だから落ち着いたものだ。

本来であればこのまま督と床に就くのだが、俺はその前に茶々を呼んだ。

茶々は恥ずかしいのだろう、何やら顔を高揚させて体をモゾモゾさせて俺の前、督の横に座った。

「これから宜しく頼む。またこれからの事についてだが、そなたには悪いが俺は茶々とそなたのどちらかを取れと言われた時、正室である茶々を選ぶ」

「「はい」」

「茶々」

「はい」

「督には『そなたを選ぶ』というておいて何だが、俺の理想は『家内安全』だ。だから督と争わず、俺が居ぬ時は家長として我が家を纏めて欲しい」

俺の言いたい事を茶々は了承してくれた。それを踏まえ、茶々は何やら督に言いたい事があるようだ。

「はい、心得ております。時に督殿」

「はい」

「私はそなたより年下、まだ殿と閨を共にしておりません」

「……はい（ポッ）」

「ですから、時に貴女には先達としていろいろとお聞きする事があるでしょう。その時は宜しくお願いしますね」

「はい、此方こそふつつか者では御座いますが、宜しくお願い申し上げます」

どんな事を聞くつもりだ。……何か気になる。

督との初夜も無事に遣り終え、これで俺も童ていゴホンゴホン……：一人前の『男』になった訳だ。

古今女子に狂う男が後を絶たないと言うが、茶々と督、そして弟分の義春の前では少なくとも威厳を持った男でいたいと思う。

第十二話 飛驒の喜び／虚心坦懐（その2）

■天正8年（1580年） 8月

ついこの間まで『暇で死ぬ』とか言っていた自分に会いたい。そしてこう言ってあげよう、

「あの人使いの荒い親父様のもとに居るのだ……諦めろ！」

最近の俺は、昼間は飛驒・越中攻めの準備、夜は茶々のご機嫌伺い又は督との逢瀬と多忙な日々を送っている。

夜の方は望む所なのだが、昼間の飛驒・越中攻めの準備の方が問題なのだ。今日も家臣と帳面を睨めっこしながら打ち合わせをしている訳だが……。

「勝長様、当家の兵は如何程で御座いましょう？」

「そうだなあ、当家は3万石の領地を拝領しているし1千程度の兵を動員せねばならぬだろう」

「それでは動員の期間は？」

「うーん、そちらは少なくとも三ヶ月、長ければ四ヶ月といったところかなあ」

「当方の援軍は？」

「滝川殿が恐らく1万の手勢を率いてくれるようだよ。それと森武蔵守長可殿が1千5百、堀左衛門督秀政殿が同じく1千5百の手勢で来てくれるらしい」

「それらの軍勢の兵糧は……各家で用意して頂けるんですよね？」

「うーん、すまんが上様が『メシは御坊が用意する。当面の兵糧だけ持ち大急ぎで美濃に集まれ！』って無茶振りされちゃったんだよ

ねえ」

「なっ、『無茶振りされちゃったんだよねえ』じゃありませぬ。どうするのです！ 当家では1万4千もの兵の胃の腑を四ヶ月もの長期にわたり満足させるだけの米を用意出来ませんよ！」

「うん、俺もそう思って上様に『ウチの小遣いじゃ足りないからお駄賃前借り出来ます？』って感じの事言ったらさあ、4万貫くれたんだ。これで何とか出来んかなあ」

「なっ、それを早く言って下さい。直ぐに尾張、美濃、伊勢の庄屋を中心に米をかき集めます」

「んゝ宜しく頼むよ。ただ、米の値が上がらぬ様に出来るだけ分散して集めてくれ」

「ははっ」

■天正8年（1580年） 9月

美濃岐阜を出発した俺達は、保木山城（現 岐阜県下呂市金山町）、宮地域（現 岐阜県下呂市宮地）と攻めて落とし、今、姉小路氏の居城・桜洞城（現 岐阜県下呂市萩原町）に来ている。

「このような端城、一当てすれば落ち申す。何卒先鋒はそれがしにっ！」

煩いよ、長可。全く戦馬鹿はこれだから困る。

「これまでの行軍で美濃方面の支城を落として参ったが、皆寡兵であつた。恐らく他の城は捨て、此処桜洞城に兵を集めていると見るべきじゃ」

流石一益殿、物事が良く見えてらっしゃる。

「なれば本城が姉小路氏の居城であれば城主、一族の逃亡を防ぐために搦め手より一隊を当てましょう。その上で本体にて大手門より攻め入りましょう」

理に適っているんだけど、頭固いなあ秀政殿。

皆の意見も言い終わった事だし、そろそろ俺の意見を行こうかな。

「一益殿の異見は尤もである。此方も全力で攻城にあたるとしよう。また秀政殿の意見だが正攻法すぎ、此方の被害が増えよう。折角上様より大筒を一基借用してきたのだ、使わぬ手はないと思う。攻城櫓と破城槌と併用すれば多少は楽に落とせよう」

「「ははっ」」

敢えて無視された長可殿が顔を真っ赤にして震えている。……ただでさえ怖い顔が更に厳つくなつた、もう貴方の顔見れません。でもねえ、馬鹿の相手をする暇ないのよ。

■天正8年（1580年）10月

桜洞城を落としてから飛騨各地の城を攻めて姉小路の残党を討った訳だが、流石に一月で飛騨全域の攻略はしんどかった。

「……」

「勝長様、見事なお働きでございましたな」

「して、これからのご予定は？」

長可は明らかに此方と視線を合わせず、秀政殿が俺を誉めてくれた後、一益殿がこれからの事を聞いてきた。

「有難う御座います。上様より、『一益と共に当地に残れ』と承っております」

「左様ですか、では我等はここで引き上げさせて頂きます」

俺が今後の方針を皆に伝えたと秀政殿が頭を下げながら丁重に辞意を告げた。

「援軍忝く、書状にて上様にもよくよく報告させて頂きます」

「「ははっ」」

ふう、やっと飛騨攻略の第一段階が終わった。これからも大変だが、一益殿も居るし何とかなるだろう。

……ところで犬山3万石はどうなるんだろう？ 返却？

■天正8年（1580年）11月

俺は居城として、その立地から飛騨の中央に位置に新しく高山城（現 岐阜県高山市）を築城し、そこに居を構える事とした。そして他の全ての城は破却した。そしてその廃材を利用して高山城の築城を行なっている訳だが、今日、高山城の本丸と石垣の築城が一段落した。流石に飛騨全域の城の廃材を多く利用した事で、短期間に費用をあまりかけずに済んだ。

他の曲輪や堀、土塁などはこれからだが、取り敢えず茶々と督を呼ぶでしょう。

今日も俺は一益殿と一緒に飛騨の内政をしているのだが、報告書には時々如何わしい箇所があり、その対処に当たっている。

「勝長様、飛騨の検地が終わりましたので、結果はこれに纏めまして御座います」

「はい、確かに」

「：幾つかの国人や寺社で隠し田をしている可能性があるとの報告を受けておりますが、如何致しましょう」

「全て罰します」

「：全てで御座いますか？」

「はい、全てです。ここで甘い顔をする第二、第三の悪事が起きます。今、その種を撒く季節ではないと存じます」

「左様で御座いますか。判りました、下の者にはその様に指示して

おきます」

「宜しく願います。それから罰ですが、他の者が同じ過ちを冒さぬよう、皆の見ている前で斬首とします」

「ははっ」

滝川一益、出来る人だよなあ。この人とその家臣が残らずに俺の俺と家臣だけだったら、飛騨全域の政は勿論の事、一揆が乱発してお手上げだった事だろう。親父様の采配、久しぶりに見事です、今回の無茶振りの恨みは解消しましたよ♪。

その一益殿だが、此度の褒美として有名な茶器二、三個と金銀が与えられた。領地の加増が無いから如何思っているかそれとなく聞いてみたが、

『既に上様から北伊勢5郡を拝領しており、今更新領を貰っても嬉しくは御座らん。其れよりも茶器を頂いた方が諸将との会合などに役立ちます。其れに家臣達も金銭を褒美に与えられた方が喜ぶ者達が多いですからなあ』

との事だった。成程、そういう考え方もあるのか、参考になった。

■天正8年（1580年）11月

親父様から『犬山3万石は当面はそのままとする』とのお許しを頂き、俺は飛騨一国を併せて6万8千石の大名になった。そしてやつと茶々と督が飛騨に来て、我が家も落ち着いてきた。

と思った途端、今日、とんでもない情報が舞い込んだ。

なんと徳川家が武田家に従属したのだ。そしてその証として徳川家の嫡男・信康と武田家の養女（武田信廉の娘）が結びついたのだ。

（あれえ、信康って死んでたんじゃなかったんだ）

そして、『そんな話は聞いてないぞ』と激怒した我が親父様が『折角くれてやった娘（徳姫という我が異母姉）を返せ』って徳川に申し付けた。

ここで家康さんが平身低頭して『武田家からの姫は側室にしますから』と詫びてればまだ良かったのだが、律儀に徳姫殿を返してきやがった、其れも子連れで。

これにより、織田徳川の盟約は破棄となった。

……織田と武田は同盟はしていないとはいえ、婚姻関係にあるんだよなあ。どうなるんだろうこれから、飛騨が戦場にならなければまあ良つかあ。それにしても武田家の皆は勿論の事だけど、徳川殿も何考えてるんだ？ お子ちゃまの俺にはよお判らん。

第十三話 飛驒の喜び／虚心坦懐（その3）

■天正8年（1580年）12月

徳川家から戻ってきた徳姫殿だが、傷心が祟ってこの月の初めに亡くなった。親父様の激怒っぷりも凄かった。葬儀の最中まで訳の判らんオーラが漂っており、とても厳粛とは無縁だった。

（姉上、安らかにお休み下さい）

そして、葬儀が終わって飛驒に帰ってきたのだが、何故か姉上の遺児である登久姫と熊姫が付いてきたのだった。

理由はまたもや我が『貧乏揺すりが様になってきた』親父様である。俺はまだ新婚さんだというのに『子の無いそなたが養女とせよ』って言うって問答無用で去っていった。

まあその場で『そなたの所に居る徳川の娘を返せ』って言われなくて良かった、良かった。督も不安にしていたしね。

そんな訳で登久姫と熊姫を俺と茶々の養女としたのだが、問題は茶々だ、主家の葬儀に参加して香典返しに子供を二人も連れてきたら『私はまだ母となる程歳を取っておりませぬ』とか激怒するかと思いきや、歳の近い妹というか娘を養育する事になったのが嬉しいのか、毎日キャピキャピとはしゃいでいる。姫達がドン引つ……ゴホン、呆然としている程に、である。

（心配して損した。でも新婚なんだから、少しは俺の事も構ってくれ、…構って下さい）

それに『そっち（茶々）がそうするんなら、こっちだって』って事で督とイチャイチャしようと思っても、督自信にとっても姪っ子だから何かと気になるご様子。

茶々と督、二人揃って姫達に構ってしまってるので、……寂しいです。

■天正9年（1581年） 1月

1月だし、ここで親父様というか織田家の近況をおさらいしておきたい。

西国の後詰に行ったのだが、理由は判らないが直ぐに戻ってきた。どうやら秀吉さんの演技で『最後の締めはお願いします』って感じで三木城はサクッと落ちたらしい。

そして山陽の羽柴勢に対して信雄殿と池田紀伊守恒興を増援させ、山陰には信孝殿を主将に明智光秀殿と丹羽長秀殿を差し向けた。

（親父様、本気で毛利を滅ぼすおつもりですか？ 出来れば痛めつけても最後は従属させるって方向でいってほしいなあ、………これって『上から目線』でしょうか？）

畿内については、筒井権少僧都順慶殿、高山大蔵少輔右近殿、河尻肥前守秀隆殿、蒲生飛騨守氏郷殿で紀伊の残党狩りをした。尤も多くの者（特に鉄砲作りに長けた者達）は早くから近江の国友に移住させており、残っていたのは根来寺の残党だけだったようだ。

東海道は、先頃同盟を反故にしてきた徳川には、我が叔父である織田上野介信包殿が尾張に領地替えして備えている。

北陸道は、柴田勝家殿が加賀をほぼ手中に収めたようだ。俺が今年中に越中へ出張る頃には能登に手が届く頃かな。

そういえば、四国、特に長宗我部に対する動きがまだ無いなあ。『まずは毛利。長宗我部はその後で』って事かな。

■天正9年（1581年） 1月

「御免下さい」

城主の間で政務をしていたら、家臣から『上杉の者と申す者が参っておりますが、如何なさいますか』と連絡が来た。
この糞寒い最中にご苦勞な事です。

「それがし、上杉家家臣、泉沢河内守久秀と申す。織田源三郎勝長様に御座いますか!？」

「いかにも、それがしが勝長だが…（何だろう、こんな時期に?）」

「此度、我が上杉は織田に臣従したく、信長様へお取り成しをお願いしたくっ!」

「…………（はあ? 今『臣従』って言った? 何かの間違いだろ、

なんで上杉が織田の臣下に下るの? 意味判んないんですけど、それにしても暑苦しい奴だなあ、真冬なのに…………）」

「宜しく願いますっ!」

「取り敢えず、この時期に我が織田に臣従する訳をお教え願えますか? それと何故それがしに取り成しを頼むのかも…」

「はっ、お恥ずかしい事ながら当家は現在、内と外に敵を抱えており身動きが取れませぬ。ならばこの際織田に、という次第で御座います。また勝長様を頼らせて頂いたのは、当家の奥方が武田家の出であり、武田家に『当家と誼のある勝長を頼られては如何か』と口添えを頂いた次第に御座います」

「…………（んゝ、何か凄い端折った説明だなあ。多分最初は武田家に口添えを頼んだけど徳川家の事で微妙な空気になって困った、つてのが本当の所だろう。それにしても『誼のある勝長を頼れ』って、これは盛信殿だな、きつと。あの人、人は良いけど自分が困ると直ぐに他人を頼る癖があるからなあ。それにしても何で武田家じゃなくて織田を頼るんだろう、その辺りが謎だ。はあゝ、上杉家にも何か思惑が有るのかも知れないが、頼られたからには何とかしたいけ

ど…）」

「……」

「判りました。取り敢えず上様（我が愛すべき親父様の事）へ書状を出します。その返答をもって如何するか考えましょう」

「はっ」

返答は直ぐに来了。そして書状には『御坊に任す』の一文だけ書いてあった。……えっこれだけ？ 相手はあの上杉家なんですけど…。謙信亡き後の上杉は眼中に無いって事ですか？

流石に『うゝん』と俺が唸っていると、最近当家の筆頭家老（仮）のようになりつつある一益殿が助け舟を出してくれた。

「勝長様、そういう事であれば上杉家に誠意を見せて貰ってから事を決めては如何で御座いましょう」

「…誠意とは？」

「まず領地は越後一国を認め、その上で当家の越中攻めに参加して貰うのです」

「越中・能登・加賀から手を引かせると申すか」

「左様です、その上で手伝い戦をさせるので御座います」

「……しかし、上杉は内にも乱を抱えていよう。果たして越中攻めに参加出来様か？」

「出来る出来ないではなく、させるのです」

「……判った、久秀殿」

「はっ」

「当家は今年の6月にも越中へ攻め込む予定でおる。其れに参加するよう景勝殿に伝えよ」

「はっ」

こうして、暫定ではあるものの、上杉家が織田家の家臣となった。……ホントに良いの？

■天正9年（1581年） 2月

督が俺の子を懐妊した。やったぜ！（実際、見に覚えが御座います、ハイ）

茶々も羨ましい半分、喜び半分で祝ってくれる。ウンウンっ、正室と側室の隔たりも無く家中平和で良い事だ。

そんな訳で今日は一日督の部屋で家族皆で談笑している。

「生まれてくる子は男の子かなあ、それとも女の子かなあ」

「男の子に決まっております。当家の世継ぎに御座います、ねっ督殿」

「えっ、あっ、はい」

「しかしなあ、俺は茶々にこそ世継ぎを産んで貰いたかったのだが……」

「（ポツ）……私は未だ体が出来ておりませぬ故、閨は共に出来ませぬ！」

「はははっ、茶々との逢瀬はもう少し先か、其れは残念じゃ、はははっ」

「んもう、殿は意地悪です」

茶々をからかいつつ周りを見渡すと、督は顔を染めながら幸せそうに微笑んでおり、二人の姫はポカーンと茶々と俺を眺めていた。（姫達にはまだ早いよね、でも嫁にはやらんともう決めているんだ）

「まあ正直なところ、男の子でも女の子でもどちらでも構わぬ、無事母子共に健やかであればな。督は初産ゆえ何かと心細かろう、茶々もその辺りを踏まえて督を助けてやってくれ」

「「はい」」

和やかな一家団欒。誠にもって目出度い。俺はこういう一生を送り

たかったのだよ。間違っても親の勝手であっちこっちに流されて、さあこれからって時に殺されるような人生なんてご免だ。

■天正9年（1581年） 2月

何で上杉家が織田に臣従を申し出て来たか、無い知恵を絞って考えてみた。そして判ってきた事がある。

まず、越後という場所柄だ。南は関係が良好な武田家が居るのだが、東に最上家、芦名家、伊達家といった奥羽勢がおり、西からは織田家が迫っている。そして東西の敵に対して直ぐに武田家から援軍が来れないので、初期対応には自力で当たらなければならない。そして内が固まっていけないから東西から同時に敵が攻めてきたらお仕舞いという訳だ。

だったらどちらかと手を結ぼうと考えても不思議ではない。そしてその『どちらか』が織田と云う事だ。

これにより、新発田重家を討って内乱を終わらせて国力が戻ったら、後ろと横っ腹を気にせずに奥羽攻略に集中出来る形を取れる。

ただ一つ問題がある。既に武田家と同盟を結んでいた事だ。同盟を結んでいるにも関わらず他家に臣従する訳だから、現状“織田家は敵ではないが味方ではない”という距離にいる武田家としては面白く無いはずだ。

しかし此処で『織田家に従おうと思っているのだが、その取り成しをお願いしたい。また同盟は一旦破棄となるがこれからも武田家との誼は続けたい』と上杉家から言われ、武田家が俺を紹介した事でこの問題を一気に解決した訳だ。

武田家への仲介依頼と織田家への臣従。双方とも従来の武士、特に

気概の高い上杉家では考えられない事だ。

実直そうな上杉景勝や先の泉沢久秀ではまず考えられないだろう、
……この二点を考えた切れ者が上杉に居る！ 俺の敵となるかそれとも……、出来れば味方となって欲しい所だ。

第十三話 飛驒の喜び／虚心坦懐／（その3）（後書き）

連載当初は、『書いていけば、そのうち文章力もうPするだろう』と軽い気持ちでいたのだが、未だにお子ちゃまLVのモノしか書けてません。（自己嫌悪）

相変わらずの見苦しい駄文ですが、今後ともお付き合い頂ければ幸いです。

第十四話 飛驒の喜び／虚心坦懐（その4）

■天正9年（1581年） 3月

最近、俺は飛驒の国力向上に腐心している。

此処で云う『国力』とは住人と税の増加であり、その為には産業を興したり、人や物、そして金銭の流れを活発にさせる事なのだが…
…、現状、飛驒は地理的条件が悪すぎる。

まず東西を山脈で遮断されており、北の越中は敵国のため人や物、そして金銭といった流通が難しいため、どうしても南の岐阜に頼るところが大きくなる。

「如何したものか…」

無い知恵を絞ってみても、中々此れといった産業などが直ぐに思い付く訳でもなく、ぼんやりしていると傍にいた義春が申し訳なさそうに話し掛けてきた。

「…：勝長様」

「んんん？」

「勝長様は甲斐に居りました時、盛信様にいろいろと興業について献策されたと伺っておりますが、この飛驒で同じ事は出来ないのでしょうか？」

「うん、結論から言えば『無理』だなあ。甲斐というか武田家の時とはまず住む人の数が飛驒と雲泥の差がある。人とは可能性だ、人が居るから物を作ったり、移動させたりする力が生まれるのだ」

「はあ」

「つまり武田家では、未だやっていない何か、あの時は織物や絹・麻・綿などの紡績、港を利用した茶や硫黄の輸出だったが、それらを行なうだけの人が居たし居なければ雇うだけの資金となる碁石金

がまだあった」

「……」

「しかしこの飛騨には、人の数が少なく、また雇い入れるだけの資金も無い。そして結構商いには重要なんだが遠方との取引に利用できる海というか港が無い。……八方塞りだ」

「……資金と人を本家から分けて頂く事は出来ないのでしょうか？」

「うん、多少の融通は聞いてくれるかもしれないが……、あの親父様だからなあ、直球でお願いしたらまず却下だな。……言い方を変えて試してみるか」

「そんなに気難しいので御座いますか、御父上様は？」

「……気難しいというか、天邪鬼というか、面倒臭いのを嫌がるというか、回りくどいのも嫌いというか……」

「……勝長様も気苦労が絶えませんか」

年下の義春に励まされてしまった、……なんか空しい。

■天正9年（1581年） 3月

飛騨の国力向上について頼りになる一益殿にも相談したのだが、結論は『地道にやったら10年は軽く掛かる。そして上様はそれを許さないだろう』に落ち着いた。やっぱりそうなるよね。

という事で、俺は安土の親父様に金の無心をする事にした。

ダンっダンっダンっ！ （毎度の事ながら、親父様のご登場おー♪）

「御坊、本日は何用じゃ！」

「はっ、本日負かり越しましたのは、上様にお願いの儀が御座いますて参上した次第に御座います」

「して」

「はっ、一つに、此度飛驒の地で鉄砲生産を行ないたく、その資金と職人をお与え願えませんか？」

「……」

「既に当家には国友という鉄砲生産の地が御座いますが、鉄砲の生産技術は秘中の秘とすべきかと、なれば、山々に囲まれております飛驒は打ってつけかと」

「……」

「更に鉄砲だけでなく大筒も生産したいと考えております」

「……」

「また武器だけでなく、というか武器製造を誤魔化すため生糸や製紙の生産を始めたいと思います」

「……であるか、して如何程掛かる」

「はっ、銭2万5千貫と紀伊の雑賀で鉄砲鍛冶に携わっていた者10名、美濃の関にて刀鍛冶に携わっている者10名、生糸・製紙の得手な者20名になりまする」

「好きにせよ」

「ははっ」

何とか産業の目処が立ったな。ただ本家に依存し過ぎるのも何だし、他にも興業出来る事が無いか考えておこう。

■天正9年（1581年） 4月

本家から与えられた鉄砲鍛冶と刀鍛冶の職人を中心に、鉄砲と大筒の生産と並行して職人の育成を行なう旨を一部の家臣に命じた。そしてその場所だが旧 高原諏訪城（現 岐阜県飛驒市）の跡地とした。この辺りは垂鉛や鉛、銀の鉱山があるので鉱物の算出に山師が行き来する。その山師に紛れれば鍛冶職人が往来を誤魔化す事も容易となるだろう。

また生糸と製紙については高山城の近くに工場を建て、住人から働き手を募集する旨を家臣に命じた。

生糸と製紙の生産は軌道に乗るのは早くても二年、鉄砲と大筒に至っては三年は掛かるだろう。まあ天候による影響が少ないから一定の収入が得られるとして、他にも興業出来る事が無いだろうか……あった。

まずは酒だ。この時代は白く濁った酒が主流だ、だったら此処で清酒を造れば結構人気が出ると思う。それと比較的蕎麦とか芋が安定して採れるから焼酎なんかも造ったら良いかもしれん。

それから良質な大豆と水があるから味噌や醤油の製造なんかも向いているだろう。ただ山国だから圧倒的に原料の塩が不足しているが、此処は交易により取得するでしょう。うん、交易は一方通行では必ず荒む。双方向で盛んになれば産物だけでなく金銭も流れるし、そうなれば税も増えてくるだろう。

今思い付く興業はこんな所かな。後は飛騨全域でも楽市楽座を導入して、街道を拡大させてもっと美濃方面との交易の流れを盛んにしていこう。まあ、まだまだこれからだな。

■天正9年（1581年） 4月

今日の俺は飛騨の河川を調べている。此の地は何と言っても険しい山々に囲まれているため、急流な河川が多い。主だったところでは飛騨川、宮川、庄川だが、毎年大雨が降ると氾濫が多発する為に折角の田畑に甚大な被害が出ている。

一度に全ての河川の治水工事が出来る程裕福ではない当家であるが、

何もしないでは未来永劫水害からの脅威は無くならない。

そこで、飛騨川の旧 桜洞城付近、宮川の旧 増島城（現 岐阜県飛騨市古川町）付近の工事を行なう事にした。此の辺りは毎年の洪水で放置されているが治水が良くなれば美田が広がる事間違いないだろう。

産業にばかり注力せずに少しでも石高を上げる努力もしておかないといけない、腹が減っては戦は出来ぬってね。

そんな訳で、飛騨に駐屯している兵1万人を動員して治水工事と農地整備を今年の田植えまでに間に合うよう2月の糞寒い最中から行なっているのだが、やっと目処が立ち始めたのだった。

「勝長様あ」

工事に同行した義春が俺の名を呼びながら、遠くから元気に走ってくる。

「何だ義春う、そんなに急いでは転ぶっ……」

「えっ……うわっ」

言ってるそばから思い切り義春が転んでしまった。

「大丈夫か」

「痛たたたあ、……大丈夫にございます」

「：そうか、気を付けろと言おうとしたのだが、間に合わなんだようだ」

「はははっ」

「して、何か用か？、そんなに急いで」

「あっはい、あちらで皆さんが山積みになった低木を如何するのか悩んでおりますう」

「はあぁ、低木う。そんなの決まってるだろう！ 薪だ！ 薪

い！ 当家は唯でさえ銭が無いんだ。無駄は厳禁！」

「あっはい、判りました。そう伝えて参ります」

何か子犬みたいだなあ、義春は。こいつもそろそろ元服のことを考えてやらんと…。

真面目な話、俺は此の治水工事を行なっていてチョツとだけ武田家に人質に出てて良かったと思う。なぜなら、武田家の治水技術は天下屈指であり、その技術を多少かじる事が出来たからだ。『信玄堤』に代表される『聖牛（川倉とも言う）』とか『菱牛^{ひしうし}』といった技術をあの“嫌味な”快川和尚からゴホン……武田家から学べた事を感謝しよう。（快川和尚個人には一片の感謝の情も生じません！）

こうして飛騨川と宮川『霞堤』だけでなく武田家の技を駆使すれば、洪水も抑えられるだろうし、それによって半年後には美味しいご飯が食べられる、ウン良い事したし今日の飯も旨そうだ。

第十五話 越後の遺影（誠心誠意）（その1）

■天正9年（1581年） 5月

来月からの越中攻めは稲葉伊予守良通（一鉄）の手勢1千5百と、池田紀伊守恒興の手勢1千5百に俺と滝川の軍勢1万2千を加えた計1万5千で行なう事となった。

そして越中の情勢だが親織田派の神保長住と、親上杉氏の政策を維持しようとする長住の父長職や重臣小島職鎮らとが対立している事が判った。つまり此度は長住の助勢も兼ねての進軍となる。

俺は今、越中攻めの準備をしているのだが、まだ越中へ進軍した訳ではないのに今回の越中攻めをある意味楽しみにしている。なぜなら…。

「勝長様っ！ 勝長様の初陣は如何で御座いましたかっ！」

「うーん、俺の初陣は兵站奉行で、戦は後方で督戦してたなあ」

「左様で御座いますかあ……、しかし武田と北条の戦であればきつと壮絶なもので御座いましょうなっ」

「うーん、鉢形城は兵糧攻めだったし、八王子城の攻防戦には参加してないから“壮絶”って言葉はどうかなあ」

「……」

「あつ、しかし川越城の攻防戦は凄かったな。勝頼殿率いる武田勢と綱成殿の北条勢の虚々実々の駆け引きによって一進一退だったから」

「成程！ それがしもその様な戦をしたいものです！」

俺はこの戦が初陣となる稲葉典通と話している。歳も1つ下という事もあり俺に懐いてくれているのだ。やはり歳の近い者が一緒だと話していて楽しいな。

しかし…声がデカイよ、それに顔を近づけすぎ！ 歯あ磨いてっ、

臭いよ！

そんな典通と話していると池田元助・輝政が来た

「勝長様、家臣の方が『越中攻めにあたって早急に決済して頂きたい書類がある』との事にございます」

「うむ、判った」

「それから我が父・恒興より『輝政は此度が初陣ですが、足手纏いなら何時でも置いて行く所存』との言伝を受けております」

「あつ、それは言い過ぎでございます。それがしだってやる時はやる男にございますぞ！」

「はははっ、元助と輝政は仲が良いな」

俺より6つ年上の元助は幾分一步引いたというか、常に落ち着いている。俺も元助の歳になればもう少し落ち着くのかなあ

そして、輝政は俺と同じ年にも関わらず、未だ幼さが幾分残っている。若いなあ……って思う自体、俺は結構苦勞してるんだろなあ。

ここ最近夜は、というか夜になっても越中攻めの事前準備に追われている。今日も一益とともに兵糧や武器弾薬の調達に関する指示書を作成している。

「ふうー、一益。この辺りで少し休まぬか？」

「そうですね、少し休むとしましょう」

「あまり根を詰めすぎても良い仕事は出来ぬよ」

「ははっ、他の者に白湯でも持ってきて貰いましょう」

小休止を取り、少し落ち着くと俺は最近気になっている事を聞いてみた。

「一益とは飛騨攻め以来だからもう1年近く共におる事となるが、本領の伊勢は大丈夫か？」

「はははっ、ご安心下さい。我が愚息・一忠が伊勢に居りますし、次男の一時も政の真似事をし始めましたので大丈夫にございます」

「そうか……、一忠と一時は幾つになる？」

「そうですねあ、一忠は今年で28歳、一時は13歳になったかと」
「ふむ…、一忠は稲葉典通の様に戦に出たいとは言わぬのか」

「…申し訳御座いませぬ。一忠は生まれつき病弱でございますので、戦には向きませぬ。その代わりといっては何ですがこの一益一生懸命働かせて頂きます」

「はははっ、別に責めている訳ではない。人には向き不向きがあるゆえ、その才が活きる道を歩んでいれば問題ない」

「はははっ、左様でございますか。まあそれがしも戦しか能がありませんゆえ。がっはははっ」

■天正9年（1581年） 6月

越中に向かう織田勢は飛驒との国境を超え、庵谷峠に差し掛かったところで上杉の使者が現れた。

「それがし上杉家家臣・山岸尚家と申します」

「うむ、役目ご苦労。して、上杉の進軍は如何なっておる」

「はっ、魚津城4千に対して我が上杉は3千5百をもって城を包囲しております」

上杉が軍勢を魚津城（現 富山県魚津市）に向かわせた、兵は3千5百との事だ。まあつい昨日まで“親上杉氏”だった神保長職や小島職鎮を討とうというのだから形だけになるだろう。

しかし、敵勢を魚津に縛り付けておいてくれるだけで織田としては十分と言って良い。

「相判った、引き続き包囲を緩めず蟻の子一匹逃さぬよう事に当たるべし」

「ははっ」

山岸尚家…、一見能吏の様だが、こ奴か？ 否、武田家への仲介依頼と織田家への臣従、上杉家の舵取りするのだからその重圧は凄

まじいものがあるはず。そして目の前の男からはその重責からくる程のものが感じられない。会いたくないような、会いたくないような……。

■天正9年（1581年） 8月

上杉勢が魚津を包囲してくれている間に、富山城（富山県富山市）を奪還し、更に織田勢は越中中部から西部に掛けての一揆や長職方の残党を討ち進んだ。そしてやっと魚津に布陣する事が出来た。

「して城方は如何なっておるか」

「はっ、当初4千であった敵勢も何度か城から打って出てきた折に此方が押し戻した事、更に先月辺りから兵糧が底をついた事により2千5百程に減っております」

俺の質問に対して、景勝殿の横に座る男が丁寧に説明する。うーん、形だけの攻軍だと予想していたが、“ちゃんと仕事はしますよ、誠意は守りますよ” って事か。

「成程、既に城方は戦う気力が薄れてこようか……。上杉諸将、皆ご苦労であった」

「「ははっ」」

「景勝殿も国内が不穏な中での手伝い戦、ご苦労にござる」

「……はっ」

“ 景勝殿、もう少し愛想良くしようよお、話が膨らまないじゃないかあ ” などと俺が考えていると先程説明していた男が話し掛けてきた。

「勝長様にお願いの儀がございます！」

「……貴殿の名は？」

「申し送れました、それがし上杉家家臣・直江兼続と申します」

「ふむ、して願いは？」

「はっ、この魚津が落ちた暁には当家春日山城（現 新潟県上越市）にて臣従の儀を執り行いたく、越後まで足をお運び願えませんか
ようか」

「……」

“如何したものか”と思索しながらチラツと横に座っている一益を見ると渋い顔をしていた。……“駄目、断れ”って事かなあ。

「臣従の儀であればこの魚津でも構わぬと思うが……」

「あいや、これまでの越中攻めの疲れを癒して頂きたく、宴などの催しを行なわせて頂きます」

ここまで言われると“行かない”とは言えなくなった、むむっ、無碍に断るとなると織田の信義にも関わり、主従も糞も無くなるよな。それに“織田の手伝い戦に付き合ったのだから、今度は……”っていう思惑が見え隠れする。

あっ……そういう事か！ 俺が越後に行くとなれば、全軍とはいかなくてもかなりの兵を共に進軍させなくてはならなくなった訳だ。
“織田の手伝い戦に付き合ったのだから、今度は……上杉を助ける！
新発田重家の討伐に付き合え！”って事か。

「相判った！ 上杉の誘い有難く頂戴する」

「ははっ」

幾ら北陸とはいってもこの糞暑い夏の進軍だ、甲冑が焼けて大変なんだよな。……早く飛騨に帰って茶々とイチヤイチヤしたいなよお。
）。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9219w/>

五男？……四男じゃなかったっけ？

2011年10月10日00時09分発行